

描写の対象として選ばれているのは桃花や棠花^{からなし}などであり、「含笑花」そのものを詠み込んだ例は一つも見られなかった。とすれば、丁謂の「山居」における頸聯の二句は、中国古典詩歌史の上で、「含笑花」という花を詩に詠み込んだ最も早い時期の例として位置づけられることになるであろう。

では、そもそも「含笑花」とは、いったいどのような花なのであろうか。南宋・陳善の『捫蝨新話』巻四「論南中花卉」の条によれば、

南中の花木に北地に無き所の者有り。茉莉花・含笑花・閨提花・鷹爪花の類なり。性、皆な寒きを畏る^{おそ}るを以ってなり。……含笑に大小有り。小含笑、四時に花有り。然れども惟^ただ夏中、最も盛んなり。又た紫含笑有り。香り尤も酷烈^{もつと}たり。茉莉含笑あり。皆な日の西のかた入るを以って、稍^やや陰^{かげ}れば、則ち花開く。初めて開けば香り尤も鼻を撲つ。予、山居して事無く、每晚^{すす}涼^{しやう}みて小亭の中に坐す。忽ち香風一陣を聞くに、室に満ちて郁然^{いくぜん}たり。知る、是れ含笑の開けるを。

とあるように、「含笑花」には小含笑・紫含笑・茉莉含笑などの種類があり、濃厚な香り^{てもと}を放つことを特徴とする花であるらしい。また手許にある植物図鑑によれば、日本では「トウオガタマ」「カラタネオガタマ」と呼ばれているものがそれで、「含笑花は中国原産の常緑低木で高さ3 - 5 m」「花はバナナのような強い香がある」と説明されている。

海南島をはじめ中国の南方を原産とするこの「含笑花」。実は意外なことに、我々の身近なところでも目にすることができるのである。四月二十九日の祝日に家族で名古屋市の東山動植物園に行った折りに、私は偶然それを見つけた。星ヶ丘門から入りなだらかな坂道を下っていくと、右斜め前方に池が見えてくる。その池の北側を通る小径^{ひとけ}の、その入り口あたり^{ひとけ}の人気のない場所に人知れずその花はあった。花はクリーム色で赤紫色の縁取り

があり、濃厚な香りを漂わせていた。妻はそれを熟したメロンのような甘い香りと表現したが、私には子供の頃に使っていたバナナ味の歯磨き粉^{にお}の匂いのように感じられた。また花びらを開ききらずに咲くその姿は、まさにその名の通り、口許^{くちもと}に手を当て「笑みを含み」ひかえめに微笑む上品な女性の姿を彷彿とさせる。

「草は憂いを忘れさせるというのが、草そのものにいったいどんな憂い事があるというのか。花は微笑むことが出来るというのが、いったい誰に微笑みかけているというのか。」——花は別に人に微笑みかけるために咲いているわけではないけれども、東山公園の「含笑花」は、確かに私に微笑みかけてくれていた。

韓国キリスト教と内村

法学部
常石 希望

(一) 周知のごとく、韓国はアジアに冠たるキリスト教国となって久しい。1990年代初期の報告による信徒数は、プロテスタント1100万人、カトリック300万人、合計1400万人。これは全人口の30%、国民の3.3人に一人がキリスト教徒となる(ここ数年来の報告では、1000万人、25%、4人に一人という数字を目にすることが多い)。いずれにしろ、いつまでたっても人口の2%前後の日本とは大違いだ。一体どうして、韓国はこれほどまでのキリスト教国となったのであろうか？

私はこれを重要な問いだと思っている。なぜなら、この問いは単にキリスト教という一宗教に限定される問題などではなく、むしろそこに韓国という国を解く「カギ」が隠されていると思えるからである。むずかしく言えば、韓国という国の文化と歴史の本質がこの点に投影されていると思えるからである。

(二) 興味深いのは、この問いをひっさげて韓国の牧師・長老といった自覚的キリスト者と話し合うと、必ずと言ってよいほど彼らのほうも「なぜ日本はそんなにキリスト者が少ないのか？」という問いを真剣にいただいているという点である。文化という現象の相対性を、改めて知らされる。彼らもこの点に、日本という国の文化と歴史の本質が宿っていると考えているのである。

ところで、私たちの問いに対して彼ら韓国のキリスト者が最終的に与えてくれる回答は、ほとんどの場合つぎのようなものである。「苦難の歴史を歩んだユダヤ人・イスラエルの民は、神の前に過ちばかりを繰り返した民族であった。しかし、神はその民を神の民（選民）として選んだ。同じように苦難の民、さして優れてもいない、欠点の多いこの韓民族・韓国を神が選ばれたのだ」と。つまり、「イスラエル」と韓国を並べ、両者が共に「苦難」の歴史を歩んだ点に共通点を置き、神の一方的な「選び」に結論を置く。以上が純粋なキリスト教信仰レベルから提出される、代表的回答である。補足して言えば、キーワードの一つは「苦難」である。この「苦難」とは、一方では例えば『苦難の韓国民衆史』の中で咸 錫憲（ハム・ソクホン）が説く韓国独特のキリスト教史観を意味しており、他方この「苦難」とは主に秀吉による侵略および「日本によって国を奪われた歴史」を意味する。

(三) 実は内村鑑三も、ほぼこれと同じ主張、つまり「神の選び」に韓国キリスト教隆盛の主要な原因を見出すという主張をしている。

内村は1894年の「日清戦争」では、きわめて積

極的な義戦論者として立つ。「日清戦争」とは端的に、朝鮮半島をめぐっての日・清の覇権戦争である。内村は“Justification of Corean War”という日清戦争の義しさを英文で書き、世界に宣伝しようとした。これは同1894年に『日清戦争の義』として日本語に訳されるが（注目すべきは内村は「日清」戦争を“Corean / Korean War”としている点）、そのなかで内村は言う。遅れた朝鮮に進んだ文化を教え、朝鮮の民を開化し導くのは中国の役割ではなく、それは東洋にあって唯一の進歩国である日本の使命であり、『日本の天職』である、と。当時、かかる進歩史観に根ざした朝鮮教化論（朝鮮支配論）は、内村であれ、福沢諭吉であれ、日本の知識層に一般的な見解であった。ただ内村の場合は、「朝鮮はキリスト教の伝播発達が著しく遅れている、清国しかり、従ってアジアにおけるキリスト教先進国である日本が朝鮮にキリスト教を伝えなければならない」、という「キリスト教」的視点を基軸としていた。

ところが日露戦争（ここでは彼は非戦論者として立つ）などを経て、1909年の内村はこれが大変な間違いであったのに気づき次のように記している。

「神はかえって朝鮮を救いて、日本を棄て給うたのではあるまいか。」余輩（私）はこのことを思ひ、精神的に暗愚なる日本を去って、自らも外国宣教師の一人となりて、その教化を助けようと思った（いずれも『聖書之研究』1909,12月号、一部現代語化）。つまりここで内村は、「神は朝鮮を選ばれた」「日本を捨て、神は朝鮮を救い、朝鮮のほうを選ばれた」と言っているのである。そして「出来ることなら、神が選んだその朝鮮に宣教師として行きたい」とまで言うのである。また、このころから内村は、自分の「真の後継者」はむしろ朝鮮の信仰の友や弟子たちであろう、という発言をしばしばなすようになる。彼の友・弟子とは、のちの韓国キリスト教の偉大なる精神的指導者となった、咸 錫憲（上述）、金 教臣（キム・ギョウシン）、金 貞植（キム・ジョンシク）といったソウソウたる人物たちであった。

「なぜ韓国では、これほどキリスト者が多くなったのか?」。現代の韓国の牧師・長老も、また1909年の内村鑑三も、等しくそれは「神の選び」だと言う。しかし内村は、いまだ韓国キリスト教の草創期において、いまだ韓国のキリスト者が2%前後しかいなかった時代に、後の韓国キリスト教の隆盛と、後の日本キリスト教の衰退とを鋭く洞察し、正確に予言したのであった。「預言者、内村」と呼ぶにふさわしい。

(四) 「なぜ韓国はアジアに冠たるキリスト教国となったのか?」。もとより、この問いに対し、上とは異なるレベルの回答を求めようとする見解も多い。

例えば、柳 東植博士はその真の理由・原因を「韓国の固有文化」のなかに見出そうとする。つまり、シャーマニズムという韓国の基層文化自体が、もともとキリスト教と共通する要素を豊かに有していた点に、回答を求めようとする。

あるいは、政治史的な説明。つまり、アジア植民地化のなかで中国ほかほとんどの国が、欧米というキリスト教国によって侵略され、そのため反キリスト教へと傾きやすかったが、韓国（および台湾）だけは欧米キリスト教国ではなく「日本」という神道国によって植民地化されたのであった。

さらに上にも関連し、韓国独立運動とキリスト教との深い関係分析による説明や、アメリカという国家との関係から説明するものなど、回答は多い。

EU：フランスの語学教育 リセ・インタ・ナショナル訪問記

法学部
平尾 節子

フランスの外相、ロベール・シューマンは、1950年5月9日、「シューマン宣言」と呼ばれるプランを発表した。当時、二度にわたる世界大戦により、疲弊したヨーロッパの市民は真に平和を希求していた。シューマンは、世界平和を実現するには、紛争、大戦の原因となってきたヨーロッパの石炭・鉄鋼産業を、ヨーロッパ諸国が共同で管理するという壮大な計画を具体化することが、最良の方途と提唱し、フランス・ドイツをはじめとする6カ国の欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）を創設した。この「シューマン宣言」によって、今日のEU（ヨーロッパ連合）統合の歴史の幕が開けたのである。

現在、EU加盟国は、15か国で、11の公用語を有している。2004年には、EUは、25カ国に拡大し、その公用語は20カ国語へと、倍増する。EUの言語政策の目的は、平和と調和、多言語・多文化・多民族の共生と発展である。

「EUの多様な言語は文化遺産である」という観点から、EUは2001年、“The European Year of Languages 2001”「ヨーロッパ言語年」を提唱した。その新教育プログラムの目標は、Pluri-lingualismであり、Pluri-culturalismである。複数言語「1+2」、すなわち「母語プラスEUの2か国語」以上の言語習得と、多文化教育を推進することを目的としている。